

かなでほんちゅうしんぐら

仮名手本忠臣蔵

〔解説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのう）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

「あらずじ」

《大序》

〔鶴が岡兜改めの段〕 暦応元年（二三三八）二月下旬、鶴ヶ丘八幡宮の造営が成就したので、足利將軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。

《六段目》

〔身売りの段〕 勘平が家に帰ると、祇園町から一文字才兵衛がおかるを迎えに来ていた。自分のために遊女となる女房と両親の志を有難く思ったが、舅の与市兵衛はまだ帰らず、その時借りたという財布が、昨夜の旅人のもと同じなので勘平は苦悶した。おかるは別れを惜しんで連れて行かれる。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

大序 鶴が岡兜改めの段

嘉肴ありといへども食せざればその味を知らずとは。

国治まつてよき武士の忠も武勇も隠るゝに、たとへば星の昼見えず夜は乱れて現はるゝ、ためしをこゝに仮名書の太平の代の政。頃は暦応元年二月下旬。足利將軍尊氏公。新田義貞を討ち亡し、京都に御所を構へ、徳風四方にあまねく、万民草の如くにて靡き従ふ御威勢。国に羽をのす鶴が岡八幡宮御造営成就し、御代参として御舍弟足利左兵衛督直義公鎌倉に下着なりければ、在鎌倉の執事高武蔵守師直御膝元に人を見下す権柄眼。御馳走の役人は桃井播磨守が弟、若狭助。伯州の城主塩治判官高定。馬場先に幕打廻し、威儀を正して相話むる。直義公仰せ出ださるゝは

「いかに師直。この唐櫃に入れおきは、兄尊氏に亡き

れし新田義貞、後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着棄の兜といひながらそのまゝにもうちおかれず。当社の御蔵に納める条、その心得あるべしとの厳命なり」

とのたまへば、武蔵守承り

「これは思ひもよらざる御事。新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名清和源氏はいくらもある。奉納の儀然るべからず候」

と遠慮なく言上す

「イヤさやうにては候まじ。この若狭助が存ずるは、これはまつたく尊氏公の御計略。新田に徒党の討ちもらされ、御仁徳を感じし、攻めずして降参さする御方便と存じ奉れば、無用との御評議卒爾なり」

といはせも果てず

「ヤア師直に向つて卒爾とは出過ぎたり。義貞討死し

たる時は大わらは。死骸のそばに落ち散つたる兜の数
は四十七。どれがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと
思ふのを奉納したその後で、さうでなければ大きな恥。
なま若輩な形をしてお尋ねもなき評議すつこんでおお
やれ」

と御前よきまゝ出るまゝに杭とも思はぬ詞の大槌。打
ち込まれてせき立つ色目。塩冶引取つて

「コハごもつともなる御評議ながら、桃井殿の申さ
るゝも治まる代の軍法。これ以て捨てられず、双方まつ
たき直義公の御賢慮仰ぎ奉る」

と申し上ぐれば、御機嫌あり。

「ホ、さいはんと思ひし故、所存あつて塩冶が婦妻を
召し連れよと言付けし。これへ招け」

とありければ

「はつ」

と答への程もなく、馬場の白砂、素足にて裾で庭掃く褌
襠は、神の御前の玉箒。玉も欺く薄化粧。塩谷が妻の顔
世御前、はるか下つて畏る。女好きの師直、そのまま声
かけ

「塩冶殿の御内室顔世殿。最前よりさぞ待遠。御大儀御
大儀。御前のお召し。近う〜」

と取持ち顔。直義御覽じ

「召出すこと外ならず。往時元弘の乱れに後醍醐帝都
にて召されし兜を、義貞に賜つたれば、最期の時に着つ
らんこと疑ひはなけれども、その兜を誰れあつて見知
る人ほかになし。そのころは塩冶が妻、十二の内侍のそ
の内にて、兵庫司の女官なりと聞き及ぶ。さぞ見知りあ
ららず。覚えあらば兜の本阿弥、目利き〜」

と女には、厳命さへも和らかに、お受け申すもまたなよ

やか

「冥加にあまる君の仰せ。それこそは私が明け暮れ手馴れし御着の兜。義貞殿拝領にて、蘭奢待といふ名香を添へて賜はる。御取次はすなわち顔世。そのときの勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、その蘭奢待を思ふまゝ、内兜にたきしめ着るならば、鬢の髪に香を留めて、名香かほる首取りしといふ者あらば、義貞が最期と思召されよとの詞はよもや違ふまじ」

と申し上げたる口もとに、下心ある師直は、小鼻いからし聞きあたる。直義詳しく聞し召し

「ホ、ウ審かなる顔世が返答。さあらんと思ひし故、落ち散つたる兜四十七、この唐櫃に入れ置いたり。見分けよ」

と御詫意の、下侍、屈むる腰の海老錠を、あける間遅しと取り出すを、おめず臆せず立寄つて、見れば所も名にし負ふ、鎌倉山の星兜。とつぱい頭、獅子頭、さて指物

は家々の流儀／＼によるぞかし。あるひは直平筋兜、鏝のなきは弓のため、その主々の好みとて、数々多きその中にも、五枚兜の竜頭これぞと言はぬその内に、ぱつと香りし名香は

「顔世が馴れし義貞の兜にてござ候」

とさし出せば

「さやうならめ」

と一決し

「塩冶、桃井両人は、宝蔵に納むべし。こなたへ来たれ」と御座を立ち、顔世にお暇給はりて段かづらを過ぎ給へば、塩冶、桃井両人も打連れ

身売りの段

急ぎける。所も名に負ふ山崎の小百姓、与市兵衛が埴生の住家、今は早野勘平が浪々の身の隠れ里、女房おかるは寝乱れし、髪取り上げんと櫛箱の、暁かけて戻らぬ夫、待つ間もとけし投島田、品よくしやんと結び立てしは、在所に惜しき姿なり。母の齡よひも杖つきの、野道とぼとぼ立ち帰り、「オ、娘、髪結ひやつたか。美しうよう出来た。イヤもう、在所はどこもかも麦秋時分で忙しい。今も藪隙で若い衆が麦かつ歌に、『親父出て見やばゝん連れて』と唄ふを聞き、親父殿の遅いが気に掛り、在口まで行たれど、ようなう影も形も見えぬ」

「サイナ、こりやまあどうして遅い事ぢや。わし、一走

り見て来やんしよ」

「イヤノウ、若い女子一人歩くは要らぬ事。殊にそなたは小さい時から在所を歩くことさへ嫌ひで、塩谷様へ御奉公にやつたれど、どうでも草深い処に縁があるやら戻りやつたが、勘平殿と二人居やれば、おとましい顔も出ぬ」

「オ、かゝ様のそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの、在所はおろかどんな貧しい暮らしでも苦にならぬ。やんがて盆になつて、『とさま出て見やかゝんつ、かゝん連れて』といふ唄の通り、勘平殿とたつた二人、踊り見に行きやんしよ。かゝさん、お前も若い時覚えがある」と、差し合ひくらぬぐわら娘、気もわさわさと見えにける。

「イヤノウ、なんぼその様に面白をかしう言やつ

ても、心の中はの」「イエイエ、済んでござんす。

主のために祇園町へ勤め奉公に行くは、かねて覚悟の前なれど、年寄つて父さんの世話やかしやんすが」

「そりや言やんな。小身者なれど兄も塩谷様の御家来なれば、外の世話する様にもない」

と親子話の中道伝ひ。駕籠を昇かせて、急ぎ来るは祇園町の一文字屋。「こうと確かこの松の木から、一軒、二軒、三軒目。オ、こゝぢや、こゝぢや」

と門口から。

「与市兵衛殿内にか」

と言ひつゝ這入れば、

「これはこれは遠い処を、ソレ煙草盆、お茶あげましや」

と親子して、槌で御家を白人屋の亭主、

「さて、夕べはこれの親父殿もいかい大儀、別条なう戻られましたかな」

「エ、さては親父殿と連れ立つて来はなされませぬか。これはしたり、お前往てから今にをいて」

「ヤア戻られぬか。ハテ面妖めんような。ハア、もし稲荷前をぶらついてかの玉どんに摘まりやせぬかの。コレ、この中こゝへ見に来て極めた通り、お娘の年

も丸五年切り。給銀は金百両、さらりと手を打つ

た。これの親父が言はるゝには『今夜中に渡さね

ばならぬ金あれば、今晚証文を認め、百両の金子きんすお

貸しなされて下され』と涙をこぼしての頼み故、

証文の上で半金渡し、残りは奉公人と引き換への

契約。何がその五十両渡すと喜んで戴き、ほたほ

た言ふて戻られたはもう、四つでもあらうかい。

夜道を一人金持つてゐらぬものと、留めても聞かず戻られたが、但しは道に「イエイエ、寄らしやる所は、ノウ母さん」

「ないとも、ないとも。ことに一時も早うそなたやわしに金見せて喜ばさうとて、息せきと戻らしやる筈ぢやに、合点がいかぬ」

「イヤイノ、コレ、コレ…合点のいくいかぬはそつちの穿鑿。せんさくこちは下がりの金渡して、奉公人を連れて去の」と、懐より金取り出だし、

「跡金の五十両、これで都合百両。サア渡す、受取らしやれ」

「お前、それでも親父殿の戻られぬ中は、のうかる、わが身はやられぬ」

「ハテぐづぐづと埒の明かぬ。コレ、ぐつともすつとも言はれぬ与市兵衛の印形、証文が物言ふわ

いの、これ証文が。今日から金で買ひ切つた体、一日違へばれこづゝ違ふ。どうでかうせぎ済むまい」

と手を取つて引立つる、

「マアマア待つて」

と取り付く母親、突き退け跳ね退け、無体に駕籠へ押し込み押し込み、鼻きあぐる門の口。鉄砲に蓑笠打ち掛け、戻りかゝつて見る勘平、つかつかと内に入り、

「駕籠の中なは女房ども、コリサマアどこへ」

「オ、勘平殿、よい所へよう戻つて下さつた」

と母の喜び、その意を得ず、

「どうでも深い訳がある。母者人、女房ども、様子聞かう」

とお上の真中、どつかと坐れば、文字の亭主、

「ハ、ア、さてはこなたが奉公人の御亭ぢやの。

いやも、たとへ御亭が布袋が大黒が弁天が毘沙門でも、『許婚の夫などと、脇より違乱妨げ申す者これ無く候』と、親父の印形あるからは、こつちには構はぬ。サアサア早う奉公人を受取らうかい」

「オ、婿殿合点が行くまい。かねてこなたに金の要る様子、娘の話で聞いた故、どうぞ調べて進ぜたいと、言ふたばかりで一銭の当てもなし。そこで親父どのの言はしやるには、ひよつとこなたの氣に、女房売つて金調へ様と、サよもや思ふてではあるまいけれど、もし二親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつそこの与市兵衛が婿殿に知らさず娘を売らう、まさかの時は切取りするも侍の習ひ、女房売つても恥にはならぬ。お主の役に立つる金、調べておましたら満更腹も

立つまいと、昨日から祇園町へ折極はめに往て、

今に房らしやれぬ故親子案じて居る中へ、親方殿が見へて、昨夜親父殿に半金渡し跡金の五十両と引き換へに、娘を連れて去なうと言ふてなれど、親父殿に逢ふての上と訳を言ふても聞き入れず。今連れて去なしやるところ、どうせうぞ、勘平殿」

「ハ、これはこれは、まづ以て舅殿の心遣ひ忝ない。したがこちにもちつとよい事があれども、マアそれは追つて、イヤコレ親父殿も戻られぬに、女房どもは渡されまい」

「とはまた何故に、とは何故に」「ハテ、いはゞ親なり判がゝり。尤も夕べ半金の五十両渡されたでもあらうけれど」

「ア、これいこのこれ、京大坂を股にかけ女護島程奉公人を抱へる一文字屋、渡さぬ金を渡したと言

ふて済むものかいの、コレ済むかいの。まだその上に慥かな事があるてや。これの親父がかの五十両といふ金を手拭にくるくると巻いて懐に入れらるゝ。『ア、そりや危ない危ない、そりや危ない。

これに入れて首に掛けさつしやれ』と、俺が着てゐる、かう、かうかうこの単物の縞の切れで拵へた金財布貸したれば、やんがて首にかけて戻らるゝ

「ヤアなんと、こなたが着てゐるこの縞の切れの、金財布か」

「オゝてや」

「あの、この縞でや」

「なんと、慥かな証拠であらうがな」

と、聞くより『ハッ』と勘平が肝先にひしと堪へ、

傍辺りに目を配り、袂の財布見合はせば、寸分違

はぬ糸入り縞。『南無三宝、さては夕べ鉄砲で撃ち殺したは舅であつたか、ハア、ハッ』と、我が胸板を二つ玉で撃ち抜かるゝより切なき思ひ、とは知らずして女房、

「コレこちの人、そはそはせずと、遣るものか遣らぬものか、分別して下さんせ」

「ム成程。ハテもうあの様に慥かに言はるゝからは、行きやらずばなるまいか」

「アノ父つさんに逢はいでもかえ」「ア、イヤイヤ、親父殿にも、今朝ちよつと逢うた、が戻りは知れまい」

「フウ、そんなりや父つさんに逢ふてかえ。それならさうと言ひもせで、母さんにもわしにも案じさしてばつかり」

と言ふに文字も凶に乗つて、

「それを見まいなどうぞすえ。七度尋ねて人疑へぢや。親父の在り所の知れたので、そつちもこつちも心が良い。まだこの上にも四の五のあれば、いやともいでんど沙汰。マアマアさらりと済んでめでたい、めでたい、ハ、ハ、ハ、ハ。ヤコレお袋も御亭も六条参りしてちと寄らしやれ。サアサアお娘、早く駕籠に乗りや、乗りや。エ、乗りやいのう」

「アイ、アイ。これ勘平殿、もう今あつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達、とうでこなさんのみんな世話。取り分けて父つさんはきつい持病。気を付けて下さんせ」

と、親の死に目を露知らず、頼む不便さいぢらしさ、『いつそ打ち明けありのまゝ、話さんにも他人あり』と、心を痛め堪へ居る。

「オ、婿殿、夫婦の別れ暇乞がしたかろけれど、そなたに未練な気も出よかと思ふての事であらうぞいのう」

「イエイエ、なんぼ別れても、主のために身を売れば、悲しうもなんともない。わしや勇んで行く。母さん、したが父つさんに逢はずに行くのが」

「オ、それも戻らしやつたらつひ逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬ様に灸据ゑて、息災な顔見せに来てたも、ヤ」

「アイ」

「ヤ」

「アイ」

「ヤ、ヤ、ヤ」

「アイナア」

「鼻紙扇もなけりや不自由な。なんにもよいか。」

ソレとばついて怪我しやんな」

と、駕籠に乗るまで心を付け、

「さらばや」

「さらば」

「なんの因果で人並な娘を持ち、この悲しい目を見る事ぢや」

と、齒を食いしぼり泣きければ、娘は駕籠にしがみつき、泣くを知らさじ聞かさじと、声をも立てず咽せ返る。情なくも駕籠舁き上げ、道を

めいぼくせんだいはぎ

伽羅先代萩

〔解説〕

天明五年（一七八五）正月、江戸結城座初演。松貫四（まつかんし）・高橋武兵衛・吉田角丸（よしだつのまる）作。九段続きの時代物。先行の歌舞伎作品に「伊達競阿邦劇場（だてくらべおくにかぶき）」などを加えて浄瑠璃化されたもの。仙台藩・伊達家のお家騒動を取り扱った作品としては最も有名。芝居でも度々上演され、特に忠義と親子の愛情の板挟みになる乳母政岡を描く六段目「御殿の段」は聴く者の涙を誘います。六段目の前半は俗に「飯炊（ままたき）」、後半は「政岡忠義（まさおかちゆうぎ）」と呼ばれています。

〔あらすじ〕

奥州城主の義綱は、吉原の遊女高尾に入れあげて国を顧みないために隠居を命じられ、幼い鶴喜代（つるきよ）君が跡目を継いでいました。しかし、この機に乗じてお家乗っ取りを企てる仁木弾正（にきだんじょう）一味に命を狙われ、鶴喜代君の乳母政岡（まさおか）は、用心のため若君を病氣と称し人々の出入りを制限、我が子千松（せんまつ）をお毒味役にし、食事もすべて自らで整えていました。

◇政岡忠義の段

梶原景時の妻、栄御前(さかえごぜん)が頼朝公からのお見舞いと称し、毒入りの菓子を持って現れます。栄御前が頼朝公からの菓子が食べられぬのかと、鶴喜代君にその菓子を食べさせようしたところ、千松が走り出て菓子を食べてしまいます。千松は毒に苦しみ始めますが、それを見た一味の八汐は、悪事が露見するのを恐れて、すぐさま千松を刺し殺してしまいます。政岡は、お上へ無礼を働いた千松は、成敗されても仕方がないと言って、悲しみを押し隠します。栄御前は、八汐の働きを褒めて帰って行き、一人になった政岡は、千松の遺骸を抱きしめ悲嘆にくれるのでした。

(その後、別間より様子を窺っていた八汐が現れ、政岡を亡き者にしようとしませんが、八汐の悪事は白日の下にさらされ、政岡は八汐を倒して千松の仇を討ちます)

政岡忠義の段

襖押開かせ梶原平三景時の奥方、夫の権威に榮御前
しとくくと座に直り

「オ、どれくも出迎ひ大儀、自ら今日来りしは右
大将よりの御上使、夫景時承はれども義綱の一子鶴
喜代、病気によつて男たる者を禁じたと聞きし故、
夫に代るこの榮、義綱隠居のその後、鶴喜代の所労
ことに食事も進まぬ由、御心を付けられしこのお菓
子、頼朝公より下され物、有難く頂戴あれ」

と持たせし菓子箱、差出せば八汐引取り

「コレハく有難い、大将よりの下され物。サアサ
ア申し若殿様、早う頂戴遊ばしませ」

と蓋押開き

「テモマア見事、結構なこのお菓子、イザ召しませ」

と差出すさすが童の嬉し気に立寄り給う鶴喜代君

「いや申し御前様、またその様なさもしい事、御病
気の御身なればお毒になつたら何となさるゝ、こつ
ちへお越し」

と政岡が詞打消す榮御前

「ヤア頼朝公より下さる、御菓子、何疑ふて頂戴さ
せぬ。ぜひ、この榮が食べさせる」

「アイヤそれでも」

「ム、但し頼朝公の仰せは背いても苦しうないか」

「サアそれは」

「サア」

「サア」

「サア」

「サアくくく」

と権柄押し 奥より走つて千松が

いぞや」

と一人呑み込み悠々と館をさして帰らるゝ。後には一人政岡が奥口窺ひ／＼て、わが子の死骸抱き上げ、耐へ耐へし悲しさを一度にわつと溜涙、せき入、せき上げ嘆きしが

「コレ千松、よう死んでくれた、出かしたナ／＼ 其方が命捨てた故、邪智深い栄御前、取替子と思ひ違へ、己が工みを打明しは親子の者が忠心を神や仏も哀れみて鶴喜代君の御武運を守らせ給ふか。

ハ、ハ、有難や／＼。これと言ふのも、この母が常々教へておいた事、幼な心に聞分けて手詰めになつた毒害をよう試みてたもつたのう。オ、出かしやつた出かしやつた／＼、其方の命は出羽奥州五十四郡の一家中、所存の臍を固めさす誠に国の礎ぞや。とは言ふものの可愛やなア、君の御為かねてより覚悟は

極めていながらも、せめて人らしい者の手にかゝつ

ても死す事か、素性賤しい銀兵衛が女房づれの刃に

かゝり、なぶり殺しを現在に傍に見てゐる母が気は、

どの様にあらうマどうあらう。思ひ回せばこのほど

から歌ふた唄に『千松が七つ八つから金山へ、一年

待てどもまだ見へぬ、二年待てどもまだ見へぬ』と

唄の中なる千松は待つ甲斐あつて父母に顔をば見す

る事もあらう同じ名のつく千松の其方は百年待つた

とて千年万年待つたとて何の便りがあるぞいの、三

千世界に子を持った親の心は皆一つ、子の可愛さに

毒なもの食べたと云ふて呵るのに、毒と見へたら試

みて死んでくれいと云ふ様な胸欲非道な母親が又と

一人あるものか。武士の胤に生れたは果報か因果か

いじらしや、死るを忠義と云ふ事は何時の世からの

習はしぞ」

と凝り固まりし鉄石心、さすが女の愚に返り人目な
ければ伏し転び、死骸にひしと抱きつき前後不覚に
嘆きしはことわり過ぎて道理なり。

いちのたにふたばくんき

一谷嫩軍記

〔解説〕宝暦元年（一七五二）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したものである。三段目までは並木宗輔が書いたがこの段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させた。

〔一〕までのあらすじ〕源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「二枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣する。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆく。後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰る。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行く。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよう。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようとするが、靡かぬのに腹を立てて姫に刃を向ける。

〔組討の段〕一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせるが、熊谷が勝負を挑んで呼び止める。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷く。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけるが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼む。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、助けてやろうとするが、それを平山に責めたてられ、進退極まってしまうに首を討つ。（そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶える。）熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのであった。

組討の段

去る程に、御船みふねを始めて、一門皆々船に浮かめば
『乗り後れじ』と、汀みぎわに打寄すれば、御座船ござふねも兵ひょう
船せんも、遙かにのび給ふ。

無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船ござに馳はせ
着ついて、『父経盛に身の上を告げ知らすことあり』と、
須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば
詮方波せんかたに駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。

かゝりけるところに後より熊谷の次郎直実

「オ、イ〜」

と声をかけ駒を早めて追っかけ来り

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。

正ただなうも敵まかに後ろを見せ給ふか引返して勝負あれ。

かく申す某それがしは、武蔵の国の住人熊谷の次郎直実げん

参まゐせん返させ給へ」

と、扇あふを上げて指招さしき

「暫し〜」

と呼ばはったり

敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛
駒を引返せば

熊谷も進み寄り

互ひに打物抜きかざし、朝日に輝く劍けんの稲妻いなづまかけ

寄り、かけ寄せちやう〜、蝶ちょうの羽がへし諸もろ燈あかみ、

駒の足並かつし〜。かしこは須磨の浦風に鎧の袖

はひら〜。群れゐる千鳥村千鳥むら〜ぱっ

と、引く汐に、寄せては返り、返りては又打ちかくる

虚々実々。勝負も果てしあらざれば

「いそうれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば

「コハしをらし」

と熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ、馬上ながらむずと組み

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鎧を踏みはづし、両馬が間にどうど
落つ。

すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて押へ

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名譽ほまれ
を顕はし給へ。又今生こんじょうに何事にも思ひ残す御事あ
らば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」
と懇ろねろに申すにぞ。

敦盛御声爽かに、

「オ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士、かく情

ある武士もののふの手にかゝり死せんこと、生前しやうぜんの面目。戦

場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と
知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘
れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、
さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれ
し跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こ
そ参議経盛の末子ぼし、無官の太夫敦盛」
と、名乗り給ひしいたはしき。

木石ぼくせきならぬ熊谷も見る目涙にくれけるが、何思ひけ
ん引起し鎧の塵を打払ひ

「この君一人いちにん助けしとて勝軍かちいぐんに負けませまじ、折節
外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う

と言ひ捨て、立別れんとするところに
後の山より武者所あまた数多の軍兵

「ヤア、熊谷。平家方の大将を組敷きながら助く

るは二心ふたごころに紛まぎれなし。きやつめ共ににが遁にげすな」

と声々に罵るにぞ

熊谷ははつとばかり、『いかゞはせん』と默然もくねんたり。

敦盛卿しとやかに

「とても通れぬ平家の運命。こゝを助かり行先にて

下司下郎の手にかゝり、死恥しにはじを見せんより早く御身

が手にかけて、人の疑ひはらされよ」

と、西に向かひて手を合はせ、御目を閉ぢて待ち給

へば

いたはしながら熊谷は御後ろに立ち廻り、弥陀の利

剣と心に唱名、振り上げは上げながら、玉のやうな

る御粧よそおひ。『情けなや無慚や』と、胸も張り裂く気

後おくれに、太刀ふり上げし手も弱り、思ひにかきくれ

討ちかねて、歎なげきに時も移るにぞ、

「ア、後れしか熊谷。早々首を討たれよ」

と、捻向き給ふ御顔を

見るに目もくれ心消え

「悴せがれ小次郎直家と申す者、丁度君の年恰好。今朝こんちよう

軍の先駆けして薄手少々負ふたるゆる、陣屋に残し

をきたるさへ心にかゝるは親子の仲。それを思へば

今こゝで討ち奉らば、さぞや御父経盛卿の、歎なげきを

思ひ過こされて」

と、さしにも猛たけき武士も、そゞろ涙にくれぬたる。

「ア、愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招

けとはこの事。早首討つて亡き後の回向を頼むさも

なくば、生害せん」

とすゝめられ、

「是非なし」

とつつ立上り

「順縁逆縁俱ともに菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにけり。

袈ほろをほどいて敦盛の、御死骸を押包み、総角取あけまきつて

引結び、手綱をたぐり結ゆひ付ける鞍のしほでやしを

くゆんでと、弓手に御首、携へて、右に轡くつわの哀れげに、

檀特山だんとせんの、憂き別れ悉陀しつた太子を送りたる、車しやのく隠童子

が悲しみも、同じ思ひの片手綱、涙ながらに引いて

行く